沖縄の未来はどこにある

沖縄県立開邦高等学校　三年　野中　秋穂

沖縄は観光の島だ。平成２７年度、沖縄県における旅行・観光の経済波及効果はおよそ１兆１４３億円。昨年度は年間８７６万人もの観光客が沖縄を訪れ、その人数は過去最高を記録したという。沖縄は観光で成り立っている島だ、そう言っても過言ではない。

本島北部の今帰仁村で生まれ成長した私にとって、観光客とは普段からなじみのあるものであった。世界遺産である今帰仁城跡にはいつも多くの人が訪れていたし、海洋博公園に行けば聞こえてくる言葉は日本語より外国語のほうが多いくらいだった。

一体何がそんなにも彼らを惹きつけているのだろうか。沖縄の一番の魅力とは、いったい何だろうか。沖縄の魅力は、と問われればまず独特の文化、日本ではほぼ唯一の亜熱帯気候とサンゴの海、ゆったりと流れる時間だと言う人もいるかもしれない。なんにせよ、魅力を感じさせるのは日本本土・外国とは異なる沖縄独特の雰囲気、つまり非日常。そして、その非日常の根底にあるのは、やはりこの島独特の気候と自然環境だ。

沖縄の未来を観光という視点から見据えるとき、自然は絶対に無視できないものだ。先に述べたように沖縄の風土がそのまま沖縄の魅力であり、観光客を呼び込む力となる。人間は自然の一部を真似することは出来るかもしれないが、『自然そのもの』を作り上げることは不可能だ。

観光と名のつく場合、現状ではショッピングモールや空港などの建設のためにとかく海の埋め立てをしがちだ。しかし、埋め立てに向いている海、すなわち遠浅のイノーや干潟は、生物多様性の宝庫である。沖縄特有の海をつくりだしている浅い海底のサンゴ、また汽水域に広がるマングローブは、さまざまな生物のゆりかごとなり、住処となり、そこには独自の生態系が発達する。イノーや干潟を土砂で埋めてしまうということはつまり、いくらかの土地を増やすためだけに、ここにしかない素晴らしい資源を無残に破壊してしまっているということに他ならない。

現在も着々と、沖縄の自然環境は破壊されてしまっている。今ニュースで盛んに取り上げられている辺野古沖の海域は、絶滅危惧種であるジュゴンが目撃されているとても貴重な海域だ。「いつか沖縄から基地を無くす」ということを目標とするなら、そんな取り返しのつかない破壊行為をするべきではない。たとえいつか土地が返還されたとしても、一度埋め立ててしまった海は、もう元の海には戻らない。

沖縄の自然は美しい。長い時間をかけて形成されてきたサンゴ礁、干潟のマングローブ、ヘゴなどの亜熱帯植物と照葉樹の入り混じる山原の森。これらは全て、私たちが受け継いできた遺産であり沖縄だけの財産だ。破壊して均して、どこにでもあるショッピングモールにしてしまうにはあまりに惜しいものだ。

埋め立て、森林伐採、そんな大きいスケールでなくとも沖縄の自然破壊はじわじわと進行

している。

私が以前家族と阿嘉島に行った際、とても綺麗なサンゴ礁を見ることができたのだが、かつてダイビングを趣味としていた私の母は「昔よりずっとサンゴが減ってしまった」と口にしていた。近所の砂浜にかつてはあふれ返っていたヤドカリも、最近ではその姿を見ることはほとんどない。海は刻一刻と変わってきている。

しかし、自然の現状を知ることが無ければ、どんなにそれが変わってしまったとしても変化を知ることはできない。未来を見据えていくためには、これまでの変化、そして現在の状況を正確に理解していく必要がある。

人間は自然を壊して生きながら、自然に憧れているように私には思われる。むしろ、都市に住む人は自然を身近に感じないからこそ、『非日常』として自然を求めるのかもしれない。本物の海を切り取り、模倣した水族館にこんなにも人が集まるのも同じ理由だろうか。

沖縄における年間観光客数は、ここ四年間ずっと過去最高を記録し続けている。今までも観光業に頼る傾向のあった沖縄の経済は、今後さらに観光の比率が大きくなっていくのではないだろうか。

観光客が求めるのは非日常だとしたら、それは他にはないその地域独特のものだ。そして、最初に述べたように文化や食の独自性は、土地の気候風土に依存している。その気候風土を、つまり自然を守り保存していくことこそ、沖縄の観光の未来には不可欠なものである。

この沖縄という島は、この沖縄の未来は、大都市と同じようなビル群の中には決してありえない。